

女神なんてお断りですつ。
8

登場人物紹介

シェリス

ハイエルフのギルドマスター。
前世からティアを知っており、
彼女を溺愛している
「自称婚約者」。

フラム

ティアと誓約している
ドラゴンの子供。
甘えん坊な性格。

ルクス

ティアの専属護衛。
「未来の夫候補」として
ティアに相応しい男に
なるべく日々
鍛錬を重ねている。

ティア

10歳の伯爵令嬢。
かつてはサティアという
王女だったが、
革命を起こして亡くなり、
再び同じ世界に転生した。
転生時に得た「女神の力」を
フル活用し、冒険者として
活動中。

マティ

伝説の魔獣といわれる
ディストリアの子供。
ティアの良き相棒でもある。

ラキア

ティアが育てた
ハイパーメイド。
家事から戦闘まで
なんでもこなす。

ローズ

公爵令嬢。
女神サティアの
生まれ変わりを
自称している。

袖子

謎の組織
「神の王国」の宗主。
人族による世界の統一を
目指しているが――？

レイナルト

フリーデル王国の王太子。
窮地に陥った時、弟王子と
居場所を入れ替えるための
魔導具を身につけている。
ヒュリアと婚約中。

マートウファル

竜人族の男性。
かつてサティアの母である
マティアスやシェリスたちと
パーティを組んでいた。

ヒュリア

隣国ウイストの王女。
「神の王国」に
蝕まれつつある
自国を心配している。

目次

第一章	女神の国防計画	7
第二章	女神が守護する王女	50
第三章	女神と思わぬ再会	88
第四章	女神の本性	124
第五章	女神の威厳 <small>いげん</small>	164
第六章	女神の仲間達	214
第七章	女神の最後の戦い	228
終章	女神が示す未来への架け橋 <small>かか</small>	288

第一章 女神の国防計画

暗い闇の中に落ちていく感覚を覚えて、どれだけの年月が経つただろう。天使として生まれたジェルバが地上に降りたのは、全て神のためだった。弱くて命も短い人族が、強靱で長命な他の種族と共存できるようにと、神は人族に七つの『神具』を与えた。それらは七つの属性に分かれている。

火……ゴージェン（浄化）の【神焰】。あらゆるものを焼き尽くし、悪しきものを浄化する。
水……シンスール（癒やし）の【神器】。あらゆる薬を生み出す。
風……ダシラス（武闘）の【神旋】。武闘の才を与える。
土……ラプーシュ（守護）の【神環】。守護する場所を結界で守る。
光……イズリス（楽園）の【神玉】。土地を潤し、失われた植物も芽吹かせる。
闇……セラヴィータ（干渉）の【神笛】。荒ぶる心を静め、思いに干渉する。
神……バトウール（記憶）の【神鏡】。世界の記憶から読み取られた者を映し出す。

けれど、これらの『神具』は長い年月の間に正しい力を失い、在り方を変えてしまったのだ。それによって人々は傲慢になり、愚かな行動を起こすようになった。三柱の神々は『神具』による争いに心を痛めている。

回収すべきだとジェルバは思った。天使である自分がやらなくてはと思い、地上へ降りたのだ。そのことを、なぜだかずっと忘れていた。だがこの数ヶ月、たびたび夢を見るのだ。その日、聞こえてきたのは、ここ何百年と思い出すことのなかった愛しい人の声だった。

「ねえ、天使様。そんなに急いでどうするの？ 時には翼を休めることも必要だと思おうわ」
ハイヒューマンの里長であるルーフェニアが、優しく微笑みかけてくる。

赤い髪と瞳。精霊の声を聞くことができ、高い魔力と身体能力を持つ。それが神に愛されたハイヒューマンという種族だった。

「……私のことは気にしないでいい……」

ジェルバが邪険にしても、ルーフェニアは微笑みを絶やすことがない。そして、木にもたれかかるとしかできないほど傷付き、疲れ果てたジェルバを癒やそうとしてくれた。

更には森の魔獣からジェルバを守るように、彼女の家族も近くに控えてくれている。それほど気にかけてもらっても、地上に生きる者というだけでジェルバに不信感を抱かせた。

「天使様は、この『神具』をお探しだったのでしょう？」

「っ、それは……【神玉】!？」

彼女が見せてきたのは、両手で覆ってしまえるくらいの水晶だ。それは間違いなくジェルバが探していた物の一つ【イズリスの神玉】だった。

「里にはもう一つ、命の水さえ作り出すといわれる【神器】がありますよ」

「どうして……」

どうしてそれを教えるのか。探していたことを知っているのなら、それを回収しようとしていることも察しているはず。

ジェルバにはルーフェニアの意図が分からなかった。しかし、彼女は事もなげに言ったのだ。

「私のもとへ『神具』が集まってきたのは、それをいずれ天に返すためだと思っていましたから」
予想外の言葉に、声が出なかった。

ここは醜い争いばかり。神が愛する者達は強欲で、なかなか『神具』を手放そうとしない。むしろ、それが尊い神から与えられた物だと知ると、他の『神具』をも手に入れようと自ら戦いを仕掛ける有様である。それが、地上に降りて知った実情だった。

これが本当に神々が助けたかった者達なのだろうか。そんな自問をどれだけ繰り返したことが。そうして暗い闇に沈んでいたジェルバの心に今、ようやく一筋の光が差し込んだようだった。

「泣かないでください」

知らぬ間に涙が頬を伝っていた。手足だけでなく、頬にも傷があるのだろう。涙が少し沁みる。

神の真意を知ろうともしない愚かな人々。それに追われて逃げる弱い自分が許せなかった。神の力を争いを使う人族が許せなかった。誰も信じられないまま、たった一人でこの地上にすることが

嫌になつていた。

けれど、ルーフェニアはそんな醜いものとは無縁だった。その微笑みを浮かべた表情は、敬愛する神にとてもよく似ていた。

「行きましょう。その翼を休めて、明日に希望を見出すために」

「……ありがとう……」

差し出された手を掴んだ時、ジェルバは確かな安らぎを感じたのだ。

だが、ここにあるのは残酷な現実——夢の残り香を必死に集める自分が浅ましい。

ずっと忘れていた過去を夢に見たからかもしれない。数ヶ月前に受けた傷が酷く痛む。けれどそれがジェルバに現実を思い出させてくれた。

「うっ、くっ、どうして……っ」

いつもそうだ。目を覚ますと、記憶はどんどん薄れていく。まるで霧に隠されていくかのように。それは、真つ白だったジェルバの翼が黒く染まった時から始まった。

塗り潰されていく過去を思い出したくても思い出せず、狂気に染まった思考が渦巻いていく。

そんな日々を、もうどれだけ生きてきたのだろう。死にたいと願ってもそれは叶えられず、弱つていく心の欠片を必死で集めた。けれど今、ようやく終われる予感がある。

「あれは女神……っ、間違いない……早く、早くっ」

黒く染まり片方だけになった翼では、天に戻ることができない。願いが叶うとすれば、神が地上

に降りてきた時だ。そう、その神が今地上にいる。呪われた自分に傷を負わせたことがその証明だ。自分を消滅させられるのは神だけ。

「女神、女神よっ……どうか滅して……っ」

ジェルバは神に祈る。罪深い自分をどうか天に還してくれと。

髪の毛一本、血の一滴さえ残さず、この地上から消してほしい。

女神によつて切り捨てられた左腕は、サラサラと砂のように時折崩れ落ちていく。再生するはずの体なのに、完全に元には戻らないのだ。

その痛みは現実を思い出させる。けれど、その現実さえ塗り潰そうとする狂気は、止まることを知らなかった。

「神の傍にあるべきなのは私だっ……」

最後に見た光景が忘れられなかった。ジェルバの金の目に焼き付いた光景。

それは、女神の傍にある汚れない真つ白な翼。神気に染まった金の髪。雲一つない澄み渡った青い空の色を映す瞳。

神に仕える天使の姿。その場所には自分がいるべきだ。

「ひひっ、はははっ、ははははははははっ」

怒りでおかしくなっていくのを止められない。だからどうか——

「女神よ。どうか……私に死を……」

ジェルバは今日も静かに祈り続ける。完全なる終わりの日を願って。



フリーデル王国。王都から馬車で一時間ほどの場所に、学園街と呼ばれる街がある。

様々な学び舎が集まるこの街で、その中心となるのが、貴族の息子子女が通うフェルマー学園だ。この学園の創設は古く、約六百年という長い歴史を持っている。

ヒュースリー伯爵家の令嬢ティアラール・ヒュースリーが通うのも、この学園である。

学園が創設された頃、ここにはバトラール王国という国があった。その第四王女として生まれたサティア・ミア・バトラールが彼女の前世だ。

そう、彼女には前世の記憶がある。その理由は『断罪の女神』として信仰を得てしまったことに起因していた。

「ティア、本当に本気なのか？」

不安げに尋ねてくるのは保護者兼護衛のルクス・カランだ。彼はつい数ヶ月前にティアが女神サティアの生まれ変わりだと知った。そのせいだけではないが、今日まで貪欲に強さを求めてきた。そして今朝方、ティアが彼にあることを提案したのだ。

「もちろん。もう王都の冒険者ギルドに申請も済ませたからね。今から行ってきて」

現在ティアは学園街にある別邸の門前で、ルクスに冒険者のAランク認定試験を受けさせようと説得を続けていた。

三ヶ月前、妖精王の棲む『赤白の宮殿』で伝説の剣に主人と認められたルクスは、間違いなくAランクに届く実力を持っている。その剣を手にとれたという事実だけで実力の証明になるのだが、本人が認めようとしないのだ。

これまでも冒険者ギルドのマスターであるハイエルフのシェリスにたびたび相手をしてもらい、メキメキとその実力を伸ばしてきたルクスだ。希有な剣を手に入れたことを抜きにしても、試験を受ける資格はあった。それを渋っていたのは、ティアや周りの者達を基準にしているせいで、自分の実力を低く見積もっているからだ。

「私の判断が信用できない？」

「そんなことはないっ。……自信がないだけだ」

ティアやシェリスだけでなく、その友人である魔王のカルツォーネ、学園の教師をしている獣人族のサクヤなど、ティアの前世を知る者達の実力は最上位のSランクだ。もう数百年の間、そこまでの力をつけた者は人族には存在しない。

彼らと手合わせをしたり、一緒にクエストを受けたりしていれば、自信が持てなくなるのも分かる。私を信じてよ」

「何度も言うけど、シェリスやカル姐を基準にしちゃダメだよ。今のルクスはAランクの実力が充分にあるから。私を信じてよ」

「……分かった……けど、俺が試験を受けてる間はあまり無茶しないでくれよ？ どこかへ行く時はシルカクロノスを連れて行ってくれ」

「うん。分かつてる。心配性だなあ」

「し、仕方ないだろう。今までの行いを思い出してみろっ」

「うん……昔より大人しいよ？」

「そうか……」

ティアの言う『昔』がサティアとして生きていた時のことだと察したルクスは、肩を落とした。
「いつてらっしやい。気を付けて」

「ああ……」

見送る気満々のティア。その足下には、ルクスを王都へ送り届ける役目を受けた、真っ白な子犬
マティがいる。

《主、ここはもつとゲキレイするべきだって、ラキアちゃんが言ってる》

屋敷の窓から顔を覗かせているメイドのラキア。彼女が先ほどから身振り手振りで何かを伝えようとしており、それをマティが解説してくれた。

「んん？ 激励か……ふむふむ、ほっぺたで良い？」

「え？」

なんのことか分からない様子のルクス。その腕を引っ張ったティアは、彼の右頬に唇を寄せた。

「んっ、いつてらっしやい」

「っっっ……っっ」

《ははっ、ルクス真っ赤。ヘンシンしてない時のマティと良いシヨウブだよ？》

楽しそうに笑う子犬の正体は、赤い体毛を持つ狼。伝説にして最強の神獣と恐れられるディスト
レアの子どもだ。

今は街中だということもあり、その特徴的な体毛をティアの魔術で白く変えている。本来ならば
大人の男性の背丈に迫る体高を持つのだが、それも魔術で小さく変えていた。

「マ、マティっ。行くぞっ。送ってくれるんだろっ」

《はっい。それじゃあ主、行ってきまっすっ》

「寄り道しないでね」

《まかせてっ》

マティが生まれて七年ほど経つが、まだまだ遊びたい盛りのお子様なので注意が必要だ。
こうして、ティアは無事ルクスを送り出すことに成功したのだった。

この世界の休日である休日日まで、まだ三日もある。学園に通う学生であるティアは当然、授業
を受けるために登校しなければならない。

「ルクスさん驚いてたよ？ なんで話しておかなかったの？」

ティアの友人で、現在は同居人でもあるアデル・マランドが、隣を歩きながら責めるような目を
向ける。朝食の席でルクスに試験を受けてくるようにと半ば命じているところを見ていたからだ。

「決意が固まるのを待ってたら全盛期を過ぎちゃうでしょ。人族の一生は短いんだから」

「それは分かるけど……なんか騙してるみたいに見えたよ？」

もう認定試験の申し込みもしておいたから、すぐに行っておいでなどと言う姿は、確かにそう見えなくてもないだろう。だが、それもちゃんと想定済みだ。

「そこはほら。ルクスは慣れてるから」

「嫌な慣れもあつたもんだな」

そう同情するのは同じく同居人で、近々親戚にもなる友人のキルシュ・ドーバンだった。

「え？ キルシュもそろそろ慣れてきたでしょ？」

「一体何に慣らそうとしているんだ？ いや、いい。言わなくていいからな！」

怯えたような表情になるキルシュ。ティアとの付き合いも二年目となれば、その破天荒ぶりにも慣れ始めていることだろう。それを指摘してやろうと思ったのだが、全力で止められてしまった。

「それより明後日の午後、王女に街を案内するって言ってなかったか？」

今年、フェルマー学園の最高学年に、隣国ウイストの第一王女であるヒュリア・ウイストが編入してきた。彼女はこのフリーデル王国の王太子と婚約しており、将来のために少しでもこの国のことを知ろうとしているようだ。

「うん。改めて学園内を回った後、街を案内することになってる」

入学式と同時に編入してから三ヶ月。学園に慣れることに重点を置いていたヒュリアは、肝心の『この国を知る』ということができていることを気にしているらしい。それを知った学園長が、それならばとティアに依頼してきたというわけだ。

「それって、護衛としてなのか？」

「一応ね。けどまあ、シルもついてくるだろうし、王女の護衛は……やっぱり必要かな？」

口にしてから考え込む。ティアの影として動いてくれるシルの報告によれば、王女が国から連れてきたのはメイドと従者の二人だけらしい。

王女の護衛としては心許ない気弱な青年が従者。その妹であるメイドは、多少は武術の心得があるようだが、護衛とは呼べない力量だろうという見立てだった。

「なんで疑問形？」

アデルが難しい顔で思案するティアを見て、つられるように眉を寄せた。

「王女なら、普通は騎士の一人でもつけてるもんなんだけどね。危機感がないのか、この国を信用しているのか……」

このフリーデル王国は、人族の国の中では治安が良い方である。たとえメイドが護身術程度しか使えなくても問題ないぐらいには安全だと認識されているだろう。

実際はそう呑気なものではないけれど、現在の学園街は別だ。

「この街の中なら、紅翼の騎士団もいるし、シルキーにも警戒するようにお願いしてあるけどね」
この国で今最も有名で実力のある騎士団はと聞かれれば、誰もが『紅翼の騎士団』と答えるだろう。彼らだけではなく、学園の地下に棲む妖精族のシルキーもこの街を守ってくれていた。

「あの騎士さん達、すっごい親切で強いもんね」

「……うん……」

ティアは苦い顔をした。何を隠そう、彼らが現在の姿になれたのは、ティアのおかげだったりする。

当時はこんなことになるとは思ってもみなかった。結果的には良かったのだが、複雑な気分になる理由は、単純に評価できない事情があるからだ。

「さすが、ティアのファンクラブ」

「その言い方やメテ……」

こうして歩いていている間も彼らの視線を感じる。ティア達が使う通学路に異常がないかを確認し、陰から見守ってくれていた。明らかに過剰なサービスタ。

「でも、実際に彼らは強いのだろうか？ 国の騎士の平均的な実力は、Cランクの冒険者にも劣ると聞いたが……紅翼の騎士達は総じてBランク相当だというじゃないか」

貴族の次男や三男が騎士の大半を占めている現状、剣などお飾りも良いところだ。もちろん、確かな実力のある者達もいる。けれど、残念ながらそれはほんの一部なのだ。

「それってさあ、あの『神の王国』だっけ？ 変な魔獣とかけしかけてくる人達と戦えるの？」

「無理だろうね。今までは運良く先手を取れたけど、不意打ちで攻めてこられたら、国の騎士達だけじゃこの国は守れないよ」

ティアは数年前から『神の王国』と呼ばれる組織と交戦してきた。彼らは『人族至上主義』を宣い、『神具』を使って国を乱そうと暗躍している。

今まではたまたま彼らの行く先々でティア達が撃退してきたが、今の騎士達が彼らを相手にしようとするれば、確実に敗北するだろう。

「あつ、だからルクスさんにAランクの試験を受けるように言ったの？ 冒険者だけで守れるよう

にとか、ティアなら考えるよね？」

アデルは今の状況からティアの意図を推察しようだ。

「半分正解。ルクス一人がAランクになったくらいでは、底上げにならないからね。けど、さすがに騎士達もAランクの冒険者が自分達より強いってことくらいは分かるでしょ？ だから、もしも時に騎士達に邪魔されないよう、Aランクっていう看板は背負っておいた方がいいんだ」

ティアが危惧しているのは、大規模な攻撃だ。これまではそれほど大事にならなかったけれど、相手の戦力がどれほどなのか未だに掴みきれない今、戦争というレベルの話になった時に騎士達だけに任せることはできない。

恐らく冒険者も入り乱れての防衛戦になるだろう。その時、平和ボケした騎士達に指揮など執られては堪ったものではない。

何より、紅翼の騎士達は別として、今の騎士達の姿勢にティアは不満があった。早急に、騎士としての正しい姿を取り戻してほしいのだ。

「相変わらず、抜かりないな……お前、それは王や国の重鎮が考えることだぞ」

キルシュの呆れたような声が聞こえるが、ティアは気にしない。仕方がないではないか。ティアには王女であった頃の記憶があるのだ。その頃の感覚はなくなるならいい。

ただ、陰でこんな姑息な裏工作じみたことをするのは初めてだ。上手くやれるか不安ではある。

「もう、ここまで来たらっと思って思うじゃん」

「だったらさあ、騎士の人達にティアが稽古をつければいいんじゃない？ 最近、ギルドでもおじ

さん達相手にやつてるでしょ？」

冒険者ギルドでめばしいクエストがない時は、鬱憤晴らしも兼ねて冒険者達に稽古をつけている。最初は最年少のAランク冒険者であるティアに、僻みから言いがかりをつけてきた者達をノシて遊んでいた。だが、それがいつしか稽古となり、この学園街の冒険者ギルドの名物となっている。

「アデル頭良い！ ダンジョンに挑戦させるつても考えたんだけど、そこまでの力もないんだもん。そうだよね。なら、稽古をつけてちよつと鍛えてやればいいんじゃない？」

ニヤけた笑みを見せるティア。アデルは周りに学園の生徒達がいまいかと心配しつつ、顔をしかめるキルシュに耳打ちする。

「騎士の人達、これから大変そうだね」

「それより、気のせいか紅翼の騎士達の顔が引きつっているように見えるんだが……」

「あ、ホントだ。っていうか悔しそう？」

ティアの稽古が嫌で引きつっているのではない。自分達以外の騎士達がティアの稽古を受けることに嫉妬しているのだが、そんなことを知るよしもない二人は首を傾げる。

一方のティアは、早くも計画を練っていた。

「そうと決まれば、すぐにでも王様に打診しなきゃね。後で火王に手紙届けてもらおう」
火の精霊王である火王をただの郵便配達に使うのは、世界中でティアだけだろう。



その日の夜。一人の男が、妖精王の住まう『赤白の宮殿』へとやってきた。彼がこのダンジョンへ来るのは約六百年ぶりのことだ。

灰色のローブは薄汚れており、長く風雨に晒されてきたことが分かる。そのローブの下の素肌は、大半が包帯で巻かれて見えなくなっていた。

顔も額の部分は隠され、襟の高い服が口元まで覆っている。目深に被られたフードのせいで、顔を判別することもできなかった。

「……」

無口なその男は、剣を一振り携えていながらも、妖精族の作り出す魔獣を拳一つで消滅させていく。そうして十階層を突破した彼は、続く十一階層で特別な裏道へと入る。その先には彼が昔、友人から預かった剣が眠っているはずだった。

「……ない……」

たどり着いたそこには、青く輝くその剣がなかった。事情を聞こうと、男は妖精王の部屋へと向かう。そして聞いたのだ——剣に選ばれし者が現れたことを。

そんな彼に妖精王が提案する。

《久しぶりに来たんだ。子孫の様子を見に行っても罰は当たらんと思うぞ》

このダンジョンからもう少し行けば、亡き妻が遺した学園がある。その学園は今も彼の子孫が守っているはずだ。

会いたい気持ちはある。今の姿ならば、街に入っても問題はないだろう。真の姿がバレることはない。けれど、それよりも剣の行方が気になった。

「……剣の主……見てくる……」

《そうか。確かAランクの試験を受けると言っていたから今頃は……》

「……試験……？ 剣の主は……人族か……」

妖精王の言うことは、男にはよく分からなかった。

《ああ。あの剣にも慣れてきたし、そろそろ試験を受けようって話になつたらしい》

世情に疎い彼でも、旅をしてきた中で、人族の実力が昔よりも落ちてきていることは知っていた。Aランクといえば、現在の人族では最高ランク。異種族の者とも渡り合える実力だ。

「……様子を見る……」

《おう。あの剣の気配は分かるか？ お前なら集中すれば感じ取れるだろうが》

特殊な魔力を帯びた剣だ。一度見れば忘れない。武人として気配を察知する能力は超人的な域に達している。このフリーデル王国ならば二つ三つの領内をまとめて探査できるだろう。

「……あつちか……」

《剣の主に会つたら、その主人にも会えよ。きつとお前にとつても悪い結果にはならない》

「……分かつた……それと王……いや、また来る……」

ここへ来たのはただの寄り道のようなもので、彼は人を探していた。その情報があればと一瞬考えたが、今は剣を優先しようと意識を切り替える。

《おう。気を付けてな》

こくりと頷いた後、男はダンジョンを後にしたのだった。



ルクスが試験に出かけて二日目。ティアは授業が終わるとすぐに王都へ向かった。
「フラム、本当に飛ぶの上手になったね」
《じょうず？ うれしい》

フラムはティアと誓約を交わした真つ赤なドラゴンだ。ドラゴンは本来、魔族が保護している。人族の手には余る存在なのだから当然だろう。

そんなドラゴンを『神の王国』が使役しようとした事件があった。彼らはドラゴンを弱らせ、『神具』と呼ばれる魔導具を使って操ろうとしたのである。

結果的に、彼らの作戦は失敗に終わった。不完全な魔導具による弱体化。それは多くのドラゴン達に不調をもたらし、その際に密漁者達の手で数頭が狩られてしまったのだ。

これによって両親を亡くしたフラムは、運良くティアに保護された。その恩を感じてか、自ら誓約を願いだしたのである。

出会った時はティアの肩に止まれるくらい小さかったのだが、成体となった今は、大人三人を乗せても飛べるほどの大きさがあった。

「普段から練習してたもんね」

《はい》

普段は街中まちなかで暮らすために出会った当初と同じ大きさに変化させている。おかげで未だに甘えん坊な性格だった。

「さてと、王城ではもうエル兄様が騎士達の訓練を始めてるはずだけど……」

ティアは昨日のうちに王に手紙を届けてもらっていた。その返信には、冒険者ランクBの第二王子エルヴァストに訓練を始めさせるとあった。

上空から城を見下ろしてみれば、多くの騎士達が集まっているのが見える。

「広い訓練場だね。フラム、あそこに降りようか。ビアンさんが手を振ってる」

訓練場を縦に見ると、王城側となる上半分に騎士達が並んでいる。下半分の中央では近衛騎士このえのビアンが白い布を両手に持って振っていた。

あれは降参の合図ではなく降下可能の合図である。ただ、さすがにドラゴンが王城に降りると目立つだろう。そう考えて、上空でフラムには小さな姿になってもらう。

ティアは風を纏まといながら緩やかに着地し、その肩にフラムが止まった。

「やつほ、ビアンさん。近衛騎士にこんなことさせてゴメンね？」

「思ってもいないことを言うのは、お嬢さんの悪い癖くせです」

「あはは。バシたか。それで、どうなってるの？」

「あ〜……それが……」

ビアンが気まずそうに目をそらす。その先には地面に敷き詰められた騎士達の背中が見えた。

「綺麗に並んで気絶とか笑えるね」

「並ぶところまでは頑張ったんですから、笑わないでやってください……」

そう。上空からは綺麗に並んで立っているように見えたのだが、実は違った。上から見えたのは頭ではなく背中。全員が地面にうつ伏せになっていたのだ。

「それより、エル兄様がすっごく怒ってるように見えるのは気のせい？」

「気のせいではなく、本気で怒っておられます。倒れた騎士達を埋めようとなさいましたからね」

「あらら。あのエル兄様が怒るってことは、相当ダメダメだったってこと？」

近付いてみると、騎士達の服がポロポロになっているのが分かる。ろくに汚したこともないであろうその服が土で汚れていた。

その惨状を作り出したエルヴァストは、現在三人の男に囲まれてふて腐れていた。三人はどうやら騎士団長のようで、ビアンの父で近衛騎士団長のリュークも交ざっている。

そのリューク以外の二人の顔は青ざめており、エルヴァストを説得するのに必死だった。

「殿下がこれほどのお力をお持ちとは知らなかった我々にも非がありますが、これは……」

「我が騎士団の者達が力不足であるというのは分かりましたので……」

しかし、エルヴァストの表情は硬い。

「本当に理解しているのか？ 冒険者をバカにしたあげく、たったこれだけの訓練で音を上げるような状態で国を守れると？ お前達は恥ずかしくないのか！」

これに対し、未だ青ざめたままの二人が弁明する。

「お守りすべき殿下の方がお強いという状況は、確かにいただけません。ですが、殿下が強すぎるのです。部下達が冒険者に劣っていると一概には……」

「そうです。冒険者がというより、殿下がお強いのですよ。それを基準にされても困ります」
エルヴァストがイラッとしたのが目に見えて分かった。彼は二人を睨みつけながら告げる。

「まだ分からないのかつ。では、これから王都の冒険者ギルドに行け。そこでBランクの冒険者に勝てたら、後のことはお前達に任せてやる」

「殿下……そのようなこと、できるわけがないでしょう」

「そうです。たとえ冒険者であっても、我々にとつては守るべき国民なのですよ？」

ものは言うようだ。これはダメだとティアも思った。リユークは何かを悟ったように口を挟まずにいる。恐らく彼もダメだと思っているのだろう。

そこでリユークがティアに気付いた。今まで気付かなかったということは、エルヴァストと他の二人の言い合いに相当ヤキモキしていたのだろう。

リユークはティアのところまで来ると、小さく頭を下げた。もうティアの力量を知っている上、王が信頼している相手ということもあり、対応の仕方としては最上級のものだ。

「申し訳ない。さすがに城の警備もあるので第一騎士団と第二騎士団だけを集めたのですが、その……殿下が『冒険者達にも劣る』と話した時点で、騎士達が反発しまして……」

「うん。なんとなく分かった。そうだなあ……王都には今……あつ、良いのがいた」

王都全域の気配を探り、適任者を探し当てたティアはビアンに頼む。

「ビアンさん、精霊達に道案内させるから、三バカを呼んできてもらえる？」

《よんだ？》

《あんない？》

《とつげき？》

「うん。かましてやっても良いからね」

《《わーい》》

「え？ ちよつ、暴れないようにっ。い、行ってきます」

ビアンは精霊視力を持っているので、普通は見えない精霊達の姿を見ることができ。陽気な精霊達を追って駆け出したビアンを見送り、ティアはエルヴァストに声をかけた。

「エル兄様あ。そろそろ気付いて〜」

「ん？ ティア？ フラムまで……気付かなかった。悪いな」

「ううん。それより今、ビアンさんに三バカを呼んできてもらってるから、その二人をギルドに行かせるのはちよつと待ってね」

「三バカ？ ……何をするんだ？」

エルヴァストは件の二人を避けて、ティアの傍へやってくる。

「実際に冒険者が相手をしないと、納得しないだろうからね。リユークさん、城の警備は私がどうにかしてあげる。だから全員集めちゃって」

「え!? ぜ、全員ですか?」

「うん。近衛も全部。それでも余裕で入るでしょ? この訓練場の大きさなら」

この際なので、全員に冒険者の実力を教えてやろうと思うのだ。この訓練場は、城の騎士や兵士が全員集まっても訓練できる広さが確保されている。城内にあっても魔術が問題なく使えるようにという理由もあるのだろう。

「それじゃあ、私は王様に会ってくるから、ピアンさんが戻ってくるまでによろしく」

「ええっ!？」

「ついでに、そこで寝てる奴らも戦えるように治療師を呼んできてね」

それだけ言い残すと、ティアは城へと入っていく。後からついてきたエルヴァストが先ほどとは打って変わって笑顔を見せた。

「面白くなりそうだな。あの訓練場は上の階からも見えるんだ。貴族達にも見せるか」

「それも良いねえ」

一緒に悪巧みをするように、エルヴァストは隣に並んでにやりと笑った。

王の執務室。ここにまつすぐ向かったティアとエルヴァストは、扉の前で近衛騎士に止められた。

「殿下、その者は……」

「ティアと私が来たど父上に伝えてくれ」

「は、はあ……」

半信半疑な様子で中に伝える騎士。すると、すぐに入るように言われた。

中には王とドーバン侯爵。それと魔術師長専用のローブを着た人物がいた。

「よく来たなティア。エル、訓練はどうだった」

「あれではダメです。一時間ももちませんでした」

「そうか……」

きつぱりと言いつ切ったエルヴァストに、王は困ったなと表情を歪める。そして、ティアに申し訳なきさそうに告げた。

「聞いての通りだ。かの組織についての報告を聞くに、国の戦力を上げるのは急務だが、騎士達を短期間で役に立つほど育て上げるのは難しいかもしれない」

『神の王国』の拠点が隣国ウイストにあるということは、既に報告されていた。更に半年と少し前にウイストと同じく隣国であるサガンの『神教会』を取り込んだというのだが、先日、もう一つ新たな報告が上がっていた。

彼らは既にそれらの国の中心部まで食い込んできているというのだ。戦争でも仕掛ける気なのかと思えるほどの動きも見せており、事態は逼迫していると思われる。

これを補足するように、ドーバン侯爵が報告した。

「つい二日前、西のイスタル伯爵領からワイバーンの群れが飛び立ったという報告がありました。ウイストに向かって飛ぶワイバーンの群れを確認したのは、これで三件目です」

「奴らは魔獣を操る術を失ったからね。慌てて補充してるんだよ。多分、色々試したけどワイバー

ンでしか成功しなかったんだと思う」

【神笛】を失ったことで、魔獣を操れなくなった。そんな中、かつての実験が実を結び、魔獣を操る術を新たに手に入れたのだろう。天才魔工師と呼ばれたジェルバなら不可能ではない。

ただし、その辺にいる魔獣では適応できなかったと思われる。そこそこの強さと思惑能力を持つワイバーンだからこそ操れたのだろう。

そこまで考察したところで、今まで口を開かずにはいた魔術師長が尋ねてきた。

「しかし、本当にそのような魔導具が作れるのですか？」

「あいつら実験してたからね。ワイバーンだけじゃなく、ドラゴンでもやってる。その上、ジェルバは研究者だもの。【神笛】っていう神の魔導具が近くにあって、それに類似する物を作ってみようと思うのは当然だよ。何より『神具』は使い手がいないければ使えないんだ。それが使えなくなった時の対応策を考えていないわけがないよ」

「なるほど……」

そこまで話すと、ティアは改めて彼を観察した。

白いものが交ざり始めた黒髪。魔術師とは思えない大柄な体。彼が冒険者だと言われても信じるだろう。手の皮膚も硬そうで歴戦の将を思わせる。純粋に杖だけを握っていたようには思えない。

そんな視線に気付いたのか、彼は顔を上げてティアに自己紹介をした。

「これは失礼いたしました。魔術師長のチェスカ・ノーバと申します」

「チェスカさん。私は冒険者のティア。よろしくね。ところで、ここに来る前はどこに？」

気になって話をストレートに聞いてみる。とても誠実な人に見えたので、素直に答えてくれるだろう。実際、そういう人物だったようだ。

「この役職をいただく前は、リザラント公爵領にて騎士団長をしておりました」

「へえ、リザラントの……公爵とは親しい？」

「え、ええ。公爵とは年齢も近く、良くしていただきました」

質問の意図が分からないせいか、チェスカは戸惑った様子を見せる。

「そう……それは使えるね」

「はい？」

ティアの小さな吹きは聞き取れなかったらしい。しかし、その瞳が剣呑に光ったのには気付いたようで、少し体を強ばらせていた。

チェスカがティアの毒牙にかかろうとしていると察したエルヴァストは、ここへ来た目的を思い出させるようにティアに声をかける。

「それでティア。これからすることを父上に報告するんじゃないのか？」

「そうだった。これから三バカ達に騎士達を叩かせるから、その間の警備は私に任せて」

「……ん？ 悪い。よく理解できなかったのだが」

王が怪訝な顔で二度聞きする。

「だからね。ドーバン侯爵の時にやったじゃん。騎士隣殺☆ それを今からやるけど、城の警備は私がするから心配しないでねってこと」

「……エル、解説を頼む」

「はい。父上」

エルヴァストが真面目に^{こた}応え、王の前に立つて説明を始めた。その間、ティアは近くにあった椅子に腰掛けてフラムとおやつを食べながら待つ。

お茶まで淹^ひれ出した頃、ようやく理解した一同は、顔色を悪くしながらティアに目を向けた。

「うん？ お話終わった？」

「あ、ああ……コリアート、城の中にいる貴族達をそれとなく集めてくれ」

王が頭を抱えながらドーバン侯爵に指示を出す。すると侯爵はすぐに部屋を出ていった。

「それでティア、すぐに始めるのか？」

「もうすぐ三バカも来るからね。問題は、騎士達がどれだけ回復してるかだけだ」

「だが、その三バカ？ の相手は誰にさせるのだ？ 相手によっては騎士達を納得させることは難しいだろう。中途半端な騎士を選べば、その騎士が負けたとしても、自分よりは弱いからと難癖^{なんくせ}をつける者がいるやもしれん」

さすがは王だ。その可能性も間違いなくあるだろう。しかし、それは想定済みだ。

「分かってる。だから、三バカには全員を相手にしてもらおうんだよ」

「……無理ではないか？ 騎士達は軽く三百を超えるのだぞ？」

「問題ないって。まあ、全員一度にはないよ？ それだけの人数が三人に殺到したら、見る方も何がなんだか分からないだろうし。だから、一つの団ごとだね」

「いや、それでも無理があるのでは？」

王が無茶だと思いうのも当然だ。けれど、ティアの知る三バカ達ならば、たとえ百人が相手でも勝てると思うのだ。

ここふた月ほど、彼らは妖精王のダンジョンで修業していた。三人で二十階層まで行けるほどの実力をつけていたのだ。パーティランクは既にAランク。現在、あの少人数では最強のパーティである。その名も『三バカ』。

「三人ともBランクの冒険者だし、経験はそれなりに積んでる。何より、体力も度胸もあるから」

「そなたがそこまで言うのなら……」

「うん。大丈夫だよ。私が相手でも笑って立ち向かってくるくらい根性あるし」

「なるほど。彼らの心配はいらないようだな。むしろ、騎士達が心配になった」

今まで不安そうだった王が腑^ふに落ちたという顔をして、ついでにチェスカに指示を出す。

「治療師を全員集めてくれ。適性がある者も全員だ」

「はあ……承知いたしました」

チェスカも部屋を出ていき、王の前に残ったのはティアとエルヴァストだけだ。

「死者は出してくれるなよ？」

「そこは頑張れとしか。まあ、三バカも手加減はするでしょう。私情でちよつと力入りそうだけど、そこはねえ」

三バカ達は騎士になりたくてなれなかった者達だ。きつと、相手にする騎士の中には騎士学校の

同期もいるだろう。そいつらが腑抜けでないことを祈る。

「それじゃあ、私は見物がてら警備の方に集中するから、エル兄様が監督ね」

「分かった」

「私も行こう。そなたの傍にいた方が安全だろうしな」

これでは仕事にならないと諦めた王は、ティアと共に見物に回ることにしたようだ。

やがて始まったのは、三バカによる一方的な蹂躪だった。

「剣の握りが甘いぞ」

「気合いが足りない。踏み込みも甘い」

「足腰弱っ。これじゃ、おじいちゃんの方がよっぽどしつかりしてるよ？」

「そうやって口で心を折るのも忘れない。」

「なんでっ……なんで出来損ないのお前らなんかにつ」

「騎士にもなれないお前らがなんでこんなに強いんだっ」

案の定、同期がいたらしい。彼らは悔しそうに地面に転がされていた。

そんな情景を上から見下ろすティア達。臨場感を出すためチェスカにお願いした拮声の魔術により、離れていても声が聞こえている。隣では王が騎士達を憐れむような表情で見守っていた。

「これは……しばらく使い物にならない……」

心も剣も折られた騎士達がすぐに立ち直れるとは思えなかったらしい。

「あははっ。大丈夫だって。この後は私が暴れるから」

「……ん？ すまない。今なんと？」

今日はよく二度聞きされるなど、ティアは首を傾げながらも一度言う。

「だから、この後、私が直々に稽古つけるから、心折れてる暇なんてないよ？」

「……リユーク、コリアート。警備の見直しを頼む。紅翼の騎士団を呼んでおいてくれ。早急にな。では、私は執務に戻る……いや、少し奥で休憩してくるからな」

現実逃避をするように王が奥へ消えていく。

「シル、王様をお願い」

「はっ」

いつの間にかやってきていたシルに、ティアは王の護衛を頼んだ。結界によって害意ある者が立ち入れないようにしてあるとはいえ、人と接触しないとは限らない。近衛騎士もいない今、護衛の一人くらいいつけなくては危なっかしい。シルならば万事上手くやるとティアは信じていた。

「さてと、もうそろそろ終わるかな」

そうして悪魔が立ち上がる。騎士達はこの日からティアを教官と呼んで畏れ、敬うようになるのだった。



その頃、王都の冒険者ギルドでは、ザランがギルドマスターと面会していた。
「待たせて悪かったねえ」

そう言つて笑顔を見せるのは、人族のギルドマスターの中で一番人気の老人だ。

「いえ。お忙しいとは分かつておりますので」

「それでも、ジルバル殿の手紙を持ってきてくれたんだからねえ。優先すべきでしょう」

ヒュースリー伯爵領の領都、サルバの冒険者であるザラン。ティアに『サラちゃん』と呼ばれて慕われる彼は、サルバと学園街を幾度となく往復し、時に王都まで足を伸ばすというのがここ一年ほど続いている。

時にティアに振り回され、時にサルバのギルドマスターであるジルバルにこき使われて過ぎた日々。それでも相手にするのがティアの関係者ばかりとなれば、平凡な冒険者のままではいられない。

ザランは数ヶ月前、ティアとジルバルの勧めでAランクの認定試験を受け、見事合格を果たしていた。ちょうど、ティア達が妖精王と再会を果たした頃だ。

数年前のザランからは考えられないほどの進歩であり、ティアの傍に^{そば}いるということは、それだけ大変なことだった。

「ありがとうございます。預かった手紙はこちらです」

「うん……ふむふむ……」

手紙に目を通したギルドマスターは、白い顎髭^{あごひげ}を撫でながらザランを見る。

「ザラン君。一つ、クエストを頼めるかな？」

「クエスト……ご指名ですか？」

「そう。ここ最近、ワイバーンの群れが不可解な移動をしているという報告が上がってきているんだ。どうも何かに操^{あやつ}られているらしくてねえ」

ザランもその噂^{うわさ}は聞いていた。ウィストの方へ群れで飛んでいくのだと。近いうちに調査のためのクエストが出されるのではないかと予想していた。それが今、ギルドマスターの指名でザランに出されようとしている。

未だに実感が湧かないが、ザランはAランクなのだ。ワイバーンの群れの中へ入っていくような危険なクエストを任せられても不思議ではない。

しかし、不意に思い出して気になることがあった。

「それは……もしかして、ティアが関係しているやつですか？」

「だろうねえ。ジルバル殿がこれだけ本腰を入れていることは、ティアちゃんが追つてる組織^{おんそく}絡みだと思うよ」

「そうですね……」

ザランは思案するように椅子に深く体を沈める。

いつの頃からだろうか。自分が蚊帳の外にいと気付いたのは。

もちろん、何かにつけてジルバールにティアとの間を歩き来させられ、その甲斐あって色々情報も得られた。ティアが何と戦っているのか、その相手が何者なのかも独自に調べている。王都とサルバを歩き来していれば、多くの情報が自然と耳に入ってくるのだ。

けれど、一度としてティアから協力を頼まれたことはない。もちろん、戦闘力で劣る自分ではティアの役に立てないと分かっている。けれど、頼ってくれてもいいではないかと思うのだ。

そんな思考が表情に出ていたのだろうか。老人ながら可愛らしいと人気のギルドマスターが目の前で笑っていた。

「ふふっ。君も若いねえ」

「いや、これでも三十半ばなんですけど……」

「あははっ。大丈夫。知ってるよ。童顔ではないもんねえ。見た目じゃなくて、中身の話」

「はあ……」

もしかして、自分はバカにされているのだろうか。そんな思いも表情に出ていたのかもしれない。「羨ましいんだよ。この歳になると、君みたいなのはキラキラして見えるんだ。女の子のことで悩むなんて素敵じゃないの」

「っ、えっ、いや、ティアは確かに女の子だけどもっ。何か勘違いしてませんかっ？」

ザランは慌てて弁明するが、相手は余裕の表情だ。

「勘違いなんかじゃないよ。君のソレは間違いない男女のソレだよ。頼りたいんでしょ？ 傍に

いたいでしょ？」

「っ!？」

言われて初めて気付いた。ティアの傍にいられないことが嫌なのだ。

面倒だと思いつつ学園街とサルバを歩き来していたのは自分だ。届け物を頼まれてサルバを出る時、早く届けたいではなく、早く学園街に着きたいと思った。滞在できる時間も計算して、おっかないメイドのラキアに文句を言われながらも、ヒュースリー伯爵家の別邸に泊まった。

数年前までは、ギルドに行けばティアに会えた。けれど、ティアがサルバを離れた今はこちらから会いに行くしかない。そうやって、ティアに協力してくれと言われるのを待っていたのだ。

ザランは自分の気持ちをゆっくりと言葉にしていく。

「ティアを見ると、もう少しこちらを顧みてほしいと思うんです。ティアは案外真面目で……色んなことを考えすぎてる。まあその、そこが良いと思うんですけど……」

彼は知らない。この独白は、魂の奥底に刻まれた思いと同じ。かつて感じた強い後悔の念が、その言葉に現れていた。

「自分も関わっていたいと思うんです。置いていかれるのは……嫌だ」

現在の思いと、魂に焼きついた思いが重なり、ザランを突き動かそうとしていた。

目の前のマスターは微笑みを浮かべて耳を傾けている。しかし、重要なことも忘れてはいない。「気付いて良かったねえ。危うくジルバール殿に刺されるところだったよ？」

「じよっ、冗談に聞こえねえ……」

「うん。間違いなく未来予想だね」
「断言された!?」

確かにそうだ。無自覚のままティアの傍にいたら、間違いなくあの嫉妬に狂ったエルフ様が後ろから遠慮なく刺してきただろう。

「あつちに戻る前に、ちゃんと気持ちに整理をつけるようにね」

「えっ、もしかして、そこまで考えてクエストを……」

時間を稼ぐ意味で指名してくれたのではと、ザランは目を見開く。だが、目の前の彼はあつさり裏切ってくれた。

「まさか。ちよつと年長者っぽくてかっこよかつたでしょ？ もう、最近可愛いばかり言われるんだもん。僕もう九十五だよ？ 威厳とか欲しいじゃん」

「……ソレ言わなかったら尊敬しましたよ……」

「えっ、失敗したっ？ 残念……」

シユンとした表情が可愛いとは口にはしないザランだ。

「あの、それで、クエストはそのワイバーンの調査で良いんですか？」

「うん。これ以上持っていられないようにしたいんだ。できれば彼らの動きを阻止するつてのもクエストに加えるよ。次に狙われそうなところのリストと、アドバイザーを用意してるから、下でちよつと待ってて。速攻で正式なクエストとして発行するからね」

「分かりました」

あわよくば犯人を捕まえようと決意する。ワイバーンが突然おかしな動きをするわけがないのだ。確実に作業員はいる。それを捕らえられれば、ティアの役に立つかもしれない。

部屋を後にしようと立ち上がるザランだったが、すぐにマスターに呼び止められた。

「あつ、もう一つアドバイス」

「なんでしょう」

向けられた笑顔に、少し嫌な予感があった。

「遺書は用意しておいた方がいいよ？ 何事も備えは大事だからね」

「それ、うちのマスター対策っすか……」

「うん。ワイバーンよりおっかないもんね」

「ちよつとは援護してくれたり……」

「やだよ。僕まだ死にたくないもん」

頬を膨らませたマスターに意趣返しを思いつく。もう何年もティアにからかわれ続けてきたのだ。

反撃の機会は逃さない。

「……そのふくれっ面、可愛いっすね」

「うわあんっ。可愛いっって言われたあつ」

その反応に満足しながら、ザランは部屋を後にしたのだった。



月明かりが美しく大地を照らす頃。ティアは王都から少々北に外れた場所に来ていた。高い塀で囲まれたそこは、夜でも門の前に見張りの兵が立っている。

ここはフリーデル王国の王家の墓だ。

見張りの兵であつても中に入ることはできず、塀を跳び越えて入り込めば邪魔者はいなかった。途中までマティに乗ってきたのだが、近くの森で別れた。久しぶりの夜の散歩だと言つてはしゃいでいたが、火王を傍に置いてきたので羽目を外しすぎないと信じた。

ゆつたりと歩いた先、中央から少し外れた場所に大木がある。その前には、『サティア』の名が彫られた墓石。そして、その横にかつての婚約者である、ラピスタの国王『セランディーオ』の墓石が並んでいた。

「セリ様……」

彼に似た王と会っていたからだろうか。ずっと足を向けることができなかつたこの場所へ久々に来ようと思つたのだ。

その時、墓石の前に立つティアの後ろに、羽音を響かせながら舞い降りた者がいた。

「ティア……どうしたの？」

彼はカランタ。金の髪に青い瞳、真っ白な翼を持つ天使だ。その前世はサティアの父で、バトラ

ル王国の最後の王であるサティルだった。

ただし、そのことに気付いたことは本人にはまだ内緒にしている。今の彼は十八歳くらいの姿をしているので、ティアの知る父とは似ても似つかなかつた。

ティアは振り返ることなく答える。

「不思議だつたんだ。なんで王都の場所が、昔のバトラールの王都があつた場所でも、ラピスタの王都があつた場所でもないのかなつて」

「……うん……」

ラピスタはここよりも北にあつた。街道や国境への距離なんかを考えれば、この辺りに王都を持つてくるのが自然だろう。そうしなかつた理由が、ティアにもようやく分かつた。

「ここには、城があつた……バトラールの城が。この木が生えてるのは、城の墓地だつたはずだもの。母様のお墓があつた場所だよね」

「……」

答えは返つてこなかつた。けれど、それが答えだと確信する。

「セリ様は、ここを王家の墓として守つてくれたんだと思う。わざわざ王都をならして塀で囲つて……あの人はそういう、優しい人だつた」

「ティア……」

ティアは鞆かばんから一通の手紙を取り出した。それは、先日妖精王から『預かり物だ』と言つて渡された物。セランディーオからの手紙だつた。

手紙を開くと、仄かに花の匂いがした。それが昔セランディーオに贈った精油の香りだと気付いた時、涙が零れた。あの人の気配を感じた気がした。

「本当に優しく、私にはもつたない人だった。私が嫁ぐ時にはもう妃が二人いたし、子どももいた。だから、レナード兄様が私を国から逃がそうとしてあてがった相手だと思ってた」

けれど違つたらしい。セランディーオは本当にサティアを愛し、共に生きたいと思つてくれたのだと、この手紙から知ることができた。二人の妃も、子どもを作ることも、全てサティアを正妃として迎えるための条件だったのだ。

「妖精王から聞いたんだ。『ハイヒューマンは子どもができにくい』つて。私が生まれたのは奇跡で、特別だったんだつて。それを知つても、セリ様は私を妃につて望んでくれたんだつて」

その手紙は、『旅立つた魂はいつか再びこの地上に戻つてくる』という伝説を信じて託されたものだった。何千年も生きる妖精族ならば、いつかまたサティアに出会えるかもしれないと、彼は信じていたらしい。

ティアは月を見上げた。美しく淡い光を纏つた大木が葉を輝かせるのが目に入った。

この木は精霊樹と呼ばれるもの。精霊界と強く結びついた、強い力を持つ木だ。

母マティアスの眠る場所には相応しいものだ。地下深くに下ろした根は世界樹にも繋がっている。止めようと思つていた涙は、いつの間にか溢れていた。

「この地下に、兄様達のお墓もあるんだつて。ホント……つ、どこまで優しいんだろう。なんで忘れてくれなかつたんだろうっ」

最期に死を選ぶような女を、どうして愛してくれたのだろう。

涙を流すティアを、いつの間にかカランタが後ろから抱きすくめていた。その痛みを一緒に分かち合うように。

ティアの手握られた手紙の最後には、セランディーオの誓いの言葉が綴られていた。

『正妃はただ一人。俺が心から愛したサティアだけ——だからいつまでも俺の隣の椅子は空けておくからな』

その言葉は今でも耳に残っているのだ。



いつ眠りについたらのか分からない。けれど、泣き疲れて目を閉じたのは覚えている。肩を抱く天使の温もりを、つい先ほどまで感じていた。

夢の気配がする。いつも過去を連れてくるその気配には抗うことができない。

サティアが婚約者セランディーオの国ラピスタにやつてきて三日。

先にいた妃達とは上手くやれそうな気がした。険悪になることもなく、彼女達はまるで実の姉のようにサティアを受け入れてくれた。

退屈しないようにとドレスを見せてくれたり、髪をいじりに来たりする。子どもに本を読み聞か

せてほしいとも言われた。

そうして過ごす平和な日々。けれど、サティアの心は穏やかではなかった。

「サティアさん？ 何か悩みごと？」

「え……あ、すみません。話の途中で……」

今も二人の妃達とお茶会をしていたのだ。それなのに、考え事をしていて。

「いいのよ。ねえ、サティアさんは戦場にも出ていたのではありませんか？ バトラールではいつも兵達に交じって訓練場で剣を振るっていたって、王に聞いたわ」

「王ったら、サティアさんのお話ばかりされるのよ？ おかげで私達、すっかりサティアさんのファンなの」

「セリ様……王が？」

彼女達はなぜか夫であるセランディーオのことを名前ではなく『王』と呼ぶ。母マティアスが父王のことを愛称で呼ぶので、それが普通だと思っていたサティアとしては違和感を覚えた。

「あら。サティアさんは名前で呼ばなくてはダメよ？」

「そうよ。きつと拗ねてしまわれるわ」

「はあ……」

意味がよく分からなかったが、サティアは今まで通り名前で呼べばいいらしい。

「それで、どうなさったの？」

「……お兄様が心配で……」

この婚約も唐突に決まったのだ。まるで時間がないと追い立てるかのようだった。

「そう……では、王に相談してみてはいかが？」

「きつと協力してくださいさるわ」

「でも、これはバトラールの問題ですし……もう少し考えてみます」

結局サティアがセランディーオに相談することはなかった。動くのは自分でなくてはならないと思っただからだ。

結婚の日取りが半月後に決まったその日。サティアはセランディーオの執務室を訪れた。

「どうかしたのか？」

「はい。結婚を取りやめていただきたい。私には、バトラールでやる必要があります」

「っ……」

きつぱりと言いつ切ったサティアに、セランディーオは目を大きく見開いた。

「結婚が嫌なわけではありません。セリ様を嫌いなわけではない。ですが、私の心はまだあの国にあります。ですから、可能ならば国が落ち着くまで待つていただきたいのです。私が、この国を想えるだけの余裕を取り戻すまで。そうでなくては、王の妃にはなれない。なるべきではない」

王の妃とは王を支え、国を想う者だ。民を愛せなくてはならない。けれど、今のサティアにはその余裕がないのだ。

いつ民達が暴動を起こしてもおかしくないような緊張感がバトラールの国にはあった。ここに来

る時も父王の瞳には光がなかった。その瞳は何も映していない。亡くした妻を思つて心の中に閉じこもっている。それでは国はすぐに立ちゆかなくなるだろう。

「お兄様が……レナード兄様がおかしな顔をしていましたのです。何かを決意したような……お兄様だけじゃない。お姉様達も……あの顔が忘れられないのです。何か良くないことが起きるような、そんな不安がここにある」

モヤモヤとしたはつきりしない感情を抱く胸を押さえる。レナードは何かを考えていた。それを実行するのに、サティアの存在は邪魔だったのかもしれない。けれど、行かなくてはと何かが訴えてくるのだ。

セランディーオは難しい顔でサティアを見つめていた。しかし、不意に肩の力を抜いて椅子から立ち上がると、サティアへ歩み寄ってくる。

「もう少しこちらを顧みてほしいものだ。本当に君は真面目だな。いや、そこが良いと思うんだけど……ここへきてもまだ、レナード相手に嫉妬するとはね……」

「セリ様？」

苦笑したセランディーオは優しくサティアを抱きしめる。大きな胸板が頬に当たった。

「行つてくるといい。君が納得できるように」

そこで懐かしい花の香りに気付く。サティアが調合し、プレゼントした精油の香りだ。それがささくれ立った心を落ち着かせていく。目を閉じて、その温もりと香りに包まれた。

「ただ、これだけは覚えておいてくれ。正妃はただ一人。俺が心から愛するのは君だけ。だからい

つまでも俺の隣の椅子は空けておくよ。帰ってくるのを待つてる……」

ゆっくりと体を離れた時、目の前にあったのは、優しく微笑む彼の顔だった。無事を祈つて額に口づけた後、クスリと笑うその顔が、サティアの胸に静かに焼き付いていった。